第20回国際日本文学研究集会研究発表（1996.11.7）

『日本書紀』と古代日本文学

NIHON SHOKI AND THE EARLY JAPANESE LITERATURE

Lioudmila ERMAKOVA＊

This paper reflects some suggestions and thoughts that came to the author's mind during the translation of "Kojiki" and "Nihon Shoki". Recently, the misteries of these two writings has become an object of new attention in the Japanese scientific circles. The motives for compiling the two books, the difference between them, their individual characteristics are interpreted by the Japanese scholars in different ways, but the opinion shared by majority of them is that "Kojiki" was addressed to the Japanese auditory and established sacredness and priority of the ruling clan. "Nihon Shoki" is believed to have been written in order to proclaim the power and authority of the newly established Japanese state and to prove its high cultural and political level, addressing, in the first place, the continental governments of China and Corea.

Accepting this attitude as a whole, the author, comparing the two texts, has come to the conclusion that "Nihon Shoki" had been written with much

＊リユドミラ・エルマコワ　モスクワ国立大学東洋語学部卒業。ロシア科学アカデミー東洋学研究所に修士論文「大和物語、その構造と構成」を提出。同研究所より「神話と儀礼から見た日本の伝統的詩歌（和歌）の発展」の業績により博士号授与。現在ロシア科学アカデミー極東文学科長。主な著書に、『日本の神々の言葉と人々の歌』『和歌の起源－神話と歴史－』などがある。

more liberty and freedom, that the aims of its compilers, in comparison with "Kojiki", seem to be not so strict and one-ideaed and the text itself is evidently much broader and richer.

To author's opinion, it can be said that to some extent "Nihon Shoki" served as some verbal cultural experiment, a kind of textual representation of the complicated cultural processes which took place in the Nara period. By this we mean that one of the fundamental directions and the aims of the compilers was, probably, in the deed of assimilating the new world, in trying to make a whole of the universe, in which a lot of trends and events were taking place simultaneously - that is, the construction of the state, shaping of the existing cultes and creating of the new ones, adoption of the continental cultural paradigms, collecting and arranging local beliefs and traditions, incessant wars and coup d'etats, spreading of the rice-cultivation and new kinds of craftsmanship etc. The world has begun to move and to change, opening the active period of form-creativity.

In according with this vision of "Nihon Shoki" author thinks it possible to consider it, in addition to the already existing kinds of approach to the text, from one more angle - that is, to see it as a result of probing creativity, including cosmology and cosmography, early steps of philosophy of history, first outlines of poetics and linguistical analysis, the early forms of the literary genres, such as uta-mondo, uta-monogatari, kashu, various types of narratives and so on.

現在、日本古代歴史と文化の諸問題、なかんづく『古事記』と『日本書紀』の問題は、日本の社会にとって、重要なテーマとなって行くであろうと考えられる。60－70年代が、日本人論、日本文化論の時期であったとすると、現代は、日本古代に対する一般的な興味の時である、と言っても、間違いではないと思

われる。アイデンティティ、国民性の特徴の探求は日本語、社会的・個人的心理、習慣と仕来りから、古代文化の領域に移動されたようである。

近頃は、『古事記』と『日本書紀』研究論文の数が、一段と増えて来たようである。記紀の問題をめぐって、様々な理論と仮説が出来上がって、その理論は新しい見地からそのテキストの、文化における機能や、特徴を説いている。現在、『古事記』の方が古く、神話的意識を反映する、詩歌的な作品であり、それにたいして、『日本書紀』の方は、人為的、政治的、歴史的、イデオロギー的なテキストであると言うことが常識となっている。言い換えれば、『古事記』は古代日本文化の潜在意識を表す文章であり、『日本書紀』は、故意に、意識的に作られており、具体的な、イデオロギー的な目的を抱いている作品であるとされている。

私も、そのような考え方が、その二つの作品の一定のレベルで、正しいと思っている。しかし、最近の5～6年間、『古事記』の中巻と『日本書紀』の巻一から巻十六までロシア語に翻訳した時に、そのテキストに対しての、前と少し違う感覚が生まれて来た。来日して、モスクワで入手出来ない記紀にかんする文献を読むことが出来たが、記紀の謎は謎のままであり、解決するどころか、その姿は一層朧げになったと言っても差し支えないと思われる。

多くの学者に、共通している考え方は、『古事記』が天皇の系譜を述べており、大和国内のオーディトリに向かって、天皇族の優秀性と権威を強調しているのに対し、『日本書紀』は、言わば、国家の系譜に重きをおき、新しい国家の力や、文化のレベルが、中国と朝鮮に劣らず、極めて高い、と言う事実を証明しようとしていると言う事である。

ある新しい仮説によると、天皇の系譜は、天皇のモガリの際、唱えられたテキストであり、系譜を唱えるわざ、そのものは、いわゆる日嗣ぎの儀式であったので、『古事記』は、モガリの場で唱えるために作られた文章とされている。

若干の仮説は『日本書紀』の一番謎めいた特徴の一つを説明しようとするものである。その特徴と言うのは、『日本書紀』には「ある書に曰く」と言う話

しが、数多く出て来て、ほぼ同じストーリであるが、経緯、主人公、事情、地名等が異なり、結果として、かなり違う内容と意味の話しを作ることである。その異文の存在を説明している仮説の中で、一つは、多くの学者が認めている歴史的な説明と言えるが、それによると、その時代に、天皇族以外にも、権力を争う氏族がおり、『古事記』に天皇の系譜しか出て来ないと言う点に関して、不満を表したので、そのような氏族の系譜をも含む『日本書紀』が現れたと言うのである。

もう一つの仮説によると、そんなに沢山異文を載せた『日本書紀』の著者は、中国と韓国の宮廷の、日本に対する態度を考えて、［日本はすでに啓蒙された国となって、神話・伝説等が真実とは思わない］と言う自分のイメージを作ろうとしたそうである。

なお、もう一つの理論によると、［記紀］の神話は、総て、儀礼神話であり、宮中で行われる儀礼を反映し、その儀礼の起源、宗教的な意味と内容を説き、儀礼の場で演奏される踊りと歌の記述であるそうである。その理論によれば、『日本書紀』の異文と言うのは、［養老令］と［延喜式］によって、儀式の形が決まる前に存在した儀礼の形式であったと言う。

最後に述べたい考え方は珍しく見えるかも知れないが、それは中国の学者の意見であり、『日本書紀』を《島国の［春秋］》として取り扱う方法である。

上述の解説は、今存在している総ての考えかたの十分の一しか述べていない。しかし、そのような対立し、矛盾する解釈を『日本書紀』に当てれば、分けても、纏めても、テキストをカバーすることが出来ないと思われる。19世紀のドイツの美学論家、ベルネの言葉を借りて言うと、《絵はベールで覆い隠されている。この絵をもっとはっきり見ようと思って、ベールを上げようとするが、ほら、そのベールが、絵そのものに描かれてある》と同じような感覚が生まれて来る。

私は自分の『日本書紀』論のような仮説を定義するつもりはない、けれども、ロシア語に飜訳した時に、生じた考え、というより、テキストに対する感覚を

述べさせて頂きたいである。すなわち、『日本書紀』より、むしろ、『古事記』の方がイデオロギー的で、狭く、具体的、意図的な作品ではないかと言う印象を受けた。その意図は何であるかと言うことを、とりあえず別にしておきたいが、『日本書紀』の方が、もっとゆるやかで、もっと自由に作られた文章であると思われる。『日本書紀』は『古事記』に比べて、当時の文化のもっと広い範囲で生きて、機能しており、極めて豊かな、多次元的な作品であると考えられる。普通、神話は、『古事記』、歴史は『日本書紀』とされているが、実は、神話の領域でも、『日本書紀』の方がずっと豊富と思われる。［記］はそのコスモロジーの話を、天と地が別れた瞬間から始めているが、［紀］は《天地、未だ剖れず、陰陽、分かれず、混沌にして... 》と言う世界の状態から宇宙の歴史を始めている。それから、コスモロジーに関しても、［紀］の方が極めて面白い。混沌の状態とその中で形成された天地と最初の神に関しての解説は、たいそう多く、その中に、1）鶏の卵のような、未分化の状態から生まれようとする兆し、2）遊ぶ魚が水の上に漂うごとく、3）虚（空）の中にある、形を言い表しがたいもの、4）葦の芽のようなもの、5）海の上に浮かぶ、根本のつながるところがない雲のような、ふわふわしたもの、6）空の中に生じた脂肪の塊り、等がある。

結局、世界の原始的なイメージはどうだったかと言う質問が自然に生じるであろう。今、述べた文章は、中国から来たモチーフや、あらゆる種族の伝統と信仰を反映している神話的概念であるが、これを総て並記した『日本書紀』の編纂者のアイディーアがどうだったであろうか。その問題を説く、おびただしい分量の解説に、もう一つを加えさせていただきたい。世界神話の概説と理論からすると、同じ神話的な観念を、異なるイメージで表現することが、世界では普遍的現象であり、書かれたテキストだけでなく、口頭伝承の時代にも存在していたのである。簡単な例を申し上げると、古代エジプトのラーと言う神は同時に太陽、鷹、鷹の目、等であり、そのような多重のイメージは、その神の概念のあらゆる段階と地方の特徴を表しているであろう。

一定の段階では、そのような異なる姿を、並べて述べると、統一していないように見られるかもしれない。しかし、それは神話的意識からくる論理と世界観に合うものの考え方であり、アリストテレスの論理から判断すると、それは矛盾に当たるかもしれないが、神話的意識の場合、一般的な原理より、むしろ、ものの特徴性が大事とされているので、そのような、神話的な定義のしかたが、その現象の複雑さと特殊性を表す術となっている。(現代も、殆ど同じように、異なっている定義の並べ方を分析の方法として使う学問は、多分、心理学であり、心理的、感情的などの過程を記す文章もそれであると考えられる)。

『日本書記』の異文に関して考えると、その役割は大きいと思われる。その役割のもう一つのアスペクトは、直接に文学の動きに関係があるであろう。『日本書紀』の文学性は、いまだに十分に研究されていない局面であると考えられる。普通は、『日本書紀』のこの面を解く学者は、歌の本と起源、前後の散文との関係と結び付き、あるいは、歌の独立性の問題を取り扱っているが、ここでは、それ以外の文学的な現象を検討したいと思う。

前に述べたように、『日本書紀』の記述、エクリチュールのスタイルは、勇敢な、自由な実験に近いものに見える。その編者の仕事が当時の政治的思想とイデオロギーと直接に結ばれていたのは勿論である。けれども、そのような結び付きは、矛盾しており、『日本書紀』の多次元性をその結び付きだけでは、説明出来ないであろう。その巨大な仕事の無意識的な目的のひとつは、多分、当時の複雑で、多次元的な難しい世界を、出来るだけ、同化する事にある。その世界は、つまり、国家の建設、以前の崇拝の決定、新しい崇拝の形成、稲作文化、あらゆる技巧の普及、大陸の精神文化の受容、異なる民族との交際等を含む世界であり、言い換えれば、動き出した世界、絶え間無く新しい形式を生ずる世界であった。時間的に、『古事記』もその世界の作品であり、記述される対象も、多くの場合、ほぼ同じで、ある学者は、安萬侶が『日本書紀』の場合にも編纂者の一人だったと言う仮説まで行っている。

いずれにせよ、『古事記』に反映された世界は思想と内容の点で、厳しいル

ールを守っているエクリチュールであり、世界の多次元性と複雑さを克服する術として、簡単化を選んで、思考の形式を減らし、統一した作品となった。『日本書紀』の方は、むしろ、当時の多様な宗教的、歴史的、文学的、美学論的実験工房のような文章となったと考えられる。

神話的なディスコースと並びに、『日本書紀』には、いわば、理論的ディスコースの局面も見る事ができると思う。その局面は原始時代から聖職者の神学的思考に根をもっていた。一方、一般に知られている通り、『日本書紀』の編纂者は、中国文化の強い影響を受けていた。その時の中国文化は、大体、すでにジャンルに応じて分別されていたので、『日本書紀』の著者は、そのテキストのなかで、様々なジャンルを試して見たと思われる。そのジャンルと言うのは、つまり、後で発展して行った風土記、歌問答と歌合わせ、歌物語、歌学書、言語学的なエチュード、魔法的昔話、叙事詩的なナラティーブ、冒険的短編小説の原型などである。文学のジャンルの外に、自然哲学の要素、神ではなく、悟りのよい人間のおかげで現れた発明品、異常の自然現象の話等が載せてある。

そのような枠の中に、『日本書紀』の編纂者は文学的な手法を使って、あらゆる話のタイプを作っている。神話の異文や、他の話の異文の纏まりも、神話的機能のほかに、各個別のナラティーブの特徴と、その述べ方の様式を強調する手段となるのではないかと考えられる。

前述の見地からすると、『日本書紀』の中に、たくさん様々な文学ジャンル、ナラティーブのタイプと手段の初歩を観察できると思われる。今、具体的に、ひとつの点だけ接する予定である。大まかに言うと、『日本書紀』のナラティーブは個別の文脈からなっている。その文脈の合わせ方、あるいは、結び方は時間的原理に従っており、第三の巻から始めて、文脈の一番最初に、日づけ、年月日が出てくる。文脈の終わりに頻繁に出てくるのは、いわゆる原因論的な末尾、と言うのは、物事、諺、しきたり、など、ものの起源を説く文章の結びであり、すべての話を原因論的な話とする末尾である。そのような末尾も、ある点で、時間の概念と結び付けてあると思われる。その文学論的な役割は、ス

トーリのレベルにおいて、ナラティーブに編者の現在と言う時間的次元を挿入して、現在と過去の瞬間をつなげるのである。

『日本書紀』の時間は、個別のエピソードの始めの部分を見ると、構造の上で、線形の性格をもっており、その時間線は、別個の時間的断片に分けられている。しかし、末尾の構造から判断すると、時間はサークルの動きをしはじめ、神話的、儀礼的な輪を作っている。

そんな構造をもっている話は多いが、今、例として面白い文脈を取り上げたい。『古事記』と違って、『日本書紀』には、ユーモラスな話も載せてある。たとえば第十四の巻に、天皇は后に蚕を飼わせることを勧めようと思って、スガルと言う人に、大和の、出来るだけ沢山の、コ（蚕）を集めさせたと言う話がある。スガルは、誤って、蚕と言うコでなく、嬰児と言うコを集めて、天皇に奉った。天皇はひどく笑って、《お前が、自分でそのこを養え》とおっしゃった。スガルはその子をお宮のほとりで養育した。そして、天皇はスガルに姓を賜って、少子部連（ちいさいこべのむらじ）とされたそうである。

ユーモラスな話は『日本書紀』の中で、ほかにもあるけれども、この話を例として選んだのはその短さのためだけでなく、その末尾は編者の時代まで伝わって来た姓の起源について述べているからである。『日本書紀』のナラティーブは、多くの場合、そのような、歴史的な時間とフォークロアの時間の組み合わせと言う構成に従っているようである。

結びに、『日本書紀』の構成を真似して、この拙文を時間的な話で終えたい。『日本書紀』の解決しがたい問題に関して考える時に、度々、『書紀』の巻十七のコピーをした、中世の未知のひとの言葉を思い出す。その人は、矛盾している異文を調和させることが出来なくて、『日本書紀』の文章に、細字で、次の言葉を書いている。《後勘構者、知之也》。すなわち、《後に考える者、知らむ》、あるいは、後世、考究する人が、いずれが正しいかを知る事であろうと。

参考文献
・『日本書紀』(『日本古典文学体系』67～68。岩波書店　昭和42)
・『日本書紀』(『日本古典文学全集』2、小学館　1994)
・『古事記・祝詞』(『日本古典文学体系』1、岩波書店　新装版　1993)
・三品由彰英『日本書紀研究』1－5（塙書房　昭和39～46)
・井上光貞『日本古代国家の研究』(『井上光貞著作集』第一巻　岩波書店　昭和40年)
・『古事記日本書紀必携』神野志隆光編（『別冊国文学』49。学燈社　1995)
・神野志隆光「古代神話のポリフォニー」(『現代思想』20　No.4)
・金井清一「神話と歴史」(『国語と国文学』平成2・5)
・岡田精司『古代王権の祭祀と神話』(塙書房　1993)
・上山春平『神々の体系』『続・神々の体系』(中公新書　1972・1975)
・松前健『日本神話の形成』(塙書房　昭和45)
・上野誠「奉誄者の系譜」(古代談話会において発表。京都　1995)
・マセー・F.「日本の伝承記述に見る二つのエクリチュール」「古事記と日本書紀の文体比較の試み」(『現代思想』1992、20・4)

討議要旨

ミコワイ・メラノヴィッチ氏から、『日本書紀』が中国または韓国のものである可能性が示唆され、とくに編者の解明の重要性が指摘された。発表者は「『日本書紀』がどこで生み出されたかということより、このテキストが日本文化の中でどのように生きてきたのかに注目したい。たとえば自分たちスラブ民族にとって、キリスト教は異国で生まれたものであるが、私たちの文化でもある。このようなスタンスで考えたい」と反論された。

また、小沢正夫氏から、自分も『日本書紀』は日本文学研究者がもっと注目すべきものと考えているとの意見が述べられた。